

二〇〇六(平成一八)年度 研究所報告

一組 織

所 長 兵藤 一夫
主 事 浅見直一郎
委 員 草野 顕之(文学部長)
藤坂 初裕(事務局長)

Robert F. Rhodes (大学院文学研究科長)

藤本 芳則(短期大学部長)

一染 真(学生部長)

水島 見一(入学センター長)

兵藤 一夫(真宗総合学術センター長)

乾 源俊(教授・中国文学)

田辺 繁治(教授・社会人類学)

延塚 知道(教授・真宗学)

一色 順心(教授・仏教学)

研究員

安富 信哉(チーフ・教授・真宗学)

門脇 健(教授・宗教学)

木越 康(助教授・真宗学)

山野 俊郎(助教授・仏教学)

東館 紹見(講師・日本仏教史学)

嘱託研究員

平 雅行(大阪大学教授)

小山 正文(同朋大学非常勤講師・安城市本證寺住職)

山田 恵文(本学短期大学部助手)

研究補助員

三木 朋哉(博士後期課程在学)

松金 直美(博士後期課程在学)

〔指定研究〕

大学史研究

研究課題 「大学史関係資料の収集・整理・公開」

研究員 織田 顕祐(チーフ・助教授・仏教学)

加来 雄之(助教授・真宗学)

東館 紹見(講師・日本仏教史学)

嘱託研究員

福島 栄寿(真宗大谷派教学研究所研究員)

西本 祐攝(本学非常勤講師)

研究補助員

加藤 基樹(博士後期課程満期退学)

橋本 真(博士後期課程満期退学)

日野 圭悟(博士後期課程満期退学)

森 剛史(博士後期課程満期退学)

二 研究組織

〔特別指定研究〕

大谷大学親鸞聖人七五〇回御遠忌記念特別指定研究

研究課題 「親鸞像の再構築」

国際仏教研究

研究課題

「諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の整理・収集・公開」

研究員

宮下 晴輝 (チーフ・キャップ・教授・仏教学)

門脇 健 (キャップ・教授・宗教学)

桂華 淳祥 (キャップ・教授・東洋史学)

田辺 繁治 (教授・社会人類学)

木越 康 (助教授・真宗学)

松川 節 (助教授・東洋史学)

村山 保史 (助教授・西洋哲学)

阿部 利洋 (講師・社会学)

井上 尚実 (講師・真宗学)

藤枝 真 (講師・哲学・宗教学)

箕浦 曉雄 (講師・仏教学)

田村 晃徳 (講師・真宗学)

羽田 信生 (毎田周一センター所長)

Michael Pye (本学客員教授・マールブルク大

学名誉教授)

Jan Van Bragt (南山大学名誉教授)

Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授)

Paul Watt (デポー大学教授)

山本 琢 (博士後期課程在学)

宮本 浩尊 (博士後期課程在学)

Conway Michael J. (博士後期課程在学)

研究補助員

西藏文献研究

研究課題

「チベット語文献のデータベース化」

研究員

福田 洋一 (チーフ・教授・仏教学)

小谷信千代 (教授・仏教学)

白館 戒雲 (教授・仏教学)

三宅伸一郎 (講師・チベット学)

Steven Hartwell (マルチスクリプトソリュ

ション)

野村正次郎 (広島修道大学非常勤講師)

井内 真帆 (中国・西南民族大学研究生)

清水 洋平 (本学非常勤講師)

目片 祥子 (博士後期課程在学)

人見 牧生 (博士後期課程在学)

真宗本願(東本願寺)造営史研究

研究課題

「真宗本願(東本願寺)造営史料の研究並びに『真宗本願(東本願寺)造営史』の編纂」

研究員

木場 明志 (チーフ・教授・国史学)

平野 寿則 (講師・日本近世史・仏教史)

伊藤 延男 (神戸芸術工科大学名誉教授)

川上 貢 (京都大学名誉教授・京都市埋蔵文

化財研究所長)

永井 規男 (関西大学名誉教授)

山岸 常人 (京都大学大学院助教授)

安藤 弥 (同朋大学専任講師)

江上 琢成 (種智院大学非常勤講師)

登谷 伸宏 (京都大学博士課程修了)

研究補助員 大谷めぐみ (博士後期課程在学)

〔一般研究／共同研究〕

研究課題 「北里闌蠟管資料群の分析とその同定…台湾を中心に」

研究員 山本 貴子 (助教授・図書館情報学)

研究員 片岡 裕 (教授・情報工学)

研究課題 「法苑珠林の総合的研究」

研究員 若槻 俊秀 (教授・中国哲学史)

研究員 石橋 義秀 (教授・国文学)

研究員 乾 源俊 (教授・中国文学)

研究員 大内 文雄 (教授・東洋史学)

研究員 佐藤 義寛 (教授・中国文学)

研究員 浦山あゆみ (助教授・中国語学)

研究員 采翠 晃 (講師・仏教学)

研究員 西尾 賢隆 (花園大学教授)

研究員 稲垣 淳央 (本学任期制助手)

研究員 本井 牧子 (本学任期制助手)

研究員 今場 正美 (本学非常勤講師)

研究員 長谷川 慎 (本学非常勤講師)

早川 智美 (本学非常勤講師)

福井 敏 (本学非常勤講師)

研究課題 「仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究―仏教的教育論の現状分析―」

研究員 皇 紀夫 (教授・臨床教育学)

研究員 門脇 健 (教授・宗教学)

研究員 関口 敏美 (助教授・教育学)

研究員 山内 清郎 (講師・教育人間学・臨床教育学)

研究課題 「新発見の安慧『俱舍論実義疏』梵文写本の研究」

研究員 小谷信千代 (教授・仏教学)

研究員 箕浦 暁雄 (講師・仏教学)

研究員 本庄 良文 (佛教大学非常勤講師)

研究員 松田 和信 (佛教大学教授)

研究員 福田 琢 (同朋大学助教授)

研究課題 「『量評釈』第二章に対するチベットの註釈の研究―仏道体系の理論と実践―」

研究員 白館 戒雲 (教授・仏教学)

研究課題 「日米関係史における日本人とアフリカ系アメ

リカ人―第二次世界大戦期までを中心に―」

研究課題 「日米関係史における日本人とアフリカ系アメ

リカ人―第二次世界大戦期までを中心に―」

研究課題 「日米関係史における日本人とアフリカ系アメ

リカ人―第二次世界大戦期までを中心に―」

研究員 古川 哲史（講師・歴史学 比較文化・社会論）

研究課題 「心理療法基礎論の為の基盤造りに向けての基礎研究」

研究員 廣瀬 幸市（助教授・臨床心理学）

三 指定研究の動向

大谷大学親鸞聖人七五〇回御遠忌記念特別指定研究

本研究は、二〇一一年に迎える親鸞聖人七五〇回御遠忌に向けて、過去五〇年間にわたる親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。本年度は、「親鸞像の再構築」というテーマの下、「史的な親鸞像の再検討」と「文献目録の作成」という二つの研究課題を軸にして、活動を行った。

一、史的な親鸞像の再検討

本年度は三人の講師を招聘し、のべ四回の公開研究会を開催した。

・第三回公開研究会…「善鸞義絶状と偽作説」（平雅行・嘱託研究員（大阪大学教授））

善鸞義絶状は、一九六〇年代から現在に至るまで真偽論争が繰り返されている。それは、義絶状には真筆がなく伝来のされ方に疑義がもたれているためであるが、平氏は中世文書の他の事例を列挙して、義絶状は真撰であると結論づけた。

中世文書の性格に着目し、実証的に論じられた平氏の発表は、親鸞の歴史思想的背景を解明し事実上の親鸞に迫るという課題において、大きな示唆を受けるものであった。

・第四回公開研究会…「御遠忌の歴史―自己と時代に向き合う―」（一）（大桑斉・本学名誉教授）

御遠忌は二五〇回忌までは、同時代史料がなく執行の確証が得られないが、永承四年（一五六一）に行われた三〇〇回忌は、御遠忌そのものが一般化していなかった当時の日本仏教界において先駆的なものであった。御遠忌は、内なる教団と自己、他者としての世間と時代に向き合う機縁であるとし、教団の五〇年ごとの自己点検と世間への開放という意味がある。そしてこの営みから求められてくるものとしての親鸞像があるということ指摘された。

・第五回公開研究会…「今、親鸞像の再構築ということ―吉野秀雄、廣小路亨の親鸞思想について―」（福島和人・本学非常勤講師）

「現代における親鸞思想との出会い」というテーマの下、近代の歌人である吉野秀雄と教育者・廣小路亨の生涯と思想が紹介された。両者ともに親鸞研究の中では、あまり知られていない人物ではあるが、親鸞の思想に生きた人である両者のような人物に注目していくことも、親鸞像の再検討を図っていく上で重要なことであると考えられた。

・第六回公開研究会…「御遠忌の歴史―自己と時代に向き合う―」（二）（大桑斉・本学名誉教授）

今回は主に中世後期から近世前期の時代を扱われたが、今回は近世から近代にかけての御遠忌の歴史を取り上げられ、近世については、四〇〇回忌から六〇〇回忌にかけての御遠忌を機縁として様々な親鸞伝が展開していることを指摘された。また、近代最初の御遠忌である明治四四年の六五〇回忌では、それに先行する明治三十一年の蓮如上人四〇〇回忌から連続して、国民国家や戦争と真宗の関わりという問題に直面していたことが指摘された。

各研究会において、今後親鸞研究を推進していく上での重要な視点が提示され、「御遠忌」が各時代における「親鸞像」形成の機縁となっていた事を確認出来た点は、大変意義深いことであった。

二、文献目録の作成

前回の御遠忌以降の五〇年間（一九六一―二〇一一）にわたる親鸞研究の各部門における研究史を回顧し、資料として活用できる文献目録の作成を目指して、現在プロジェクトを推進している。本年度は、文献目録作成方針を正式に決定し、その方針に順って作業を行い、分類ごとに「データベース」のサンプルを作成し、『真宗総合研究所紀要』第二四号（二〇〇七年三月発行）に掲載した。

大学史研究

【清沢満之研究】

①『清沢満之全集』未収録文献文字起こし作業について

今年度も引き続き、『清沢満之全集』未収録文献の翻刻作業を継続し、英洋文文献の翻刻作業を行い、文献二〇点、フィルム四九本の翻刻作業を行った。

②清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力

清沢満之記念会の清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力として、本研究班が担当する『注釈 臘扇記』（仮称）の出版準備作業を行った。主な作業として、清濁音の補正や句読点の挿入などを行い、またルビや注をつけるための読み合わせを年度中に計三八回行った。九月二〇日には、沙加戸弘・本学教授と天野勝重・本学短期大学部専任講師を招き、『注釈 臘扇記』（仮称）における国語表現等の取り扱いについての検討会を開催した。そこでは、出版目的にあった編集方針とその凡例を確認、また凡例に表れないような編集上の取り決め・表現などの確認・検討を行った。十一月九日には、清沢満之に関係する場所への調査として、清沢満之や『臘扇記』に記述される関係人物に関係のある場所（刈谷市敬専寺、安城市本証寺、西尾市唯法寺ほか）を訪問し、聞き取り調査などを行った。翌一月一〇日には、清沢満之記念館において、清沢満之『臘扇記』に記述される人名・地名・書籍名などの事項の確認のため聞き取り調査を行った。

【佐々木月樵研究】

昨年度作成した資料目録を基に資料収集を継続して行っている。

【大学史研究関係資料の保存】

当研究班の前身である真宗学事史研究・大学史編纂研究において収集された資史料の整理と保存を、前年度から継続している。現在進めている作業として、①学寮・真宗大学・真宗大谷大学・新制大谷大学時代の史料九〇〇点余りの長期保存に向けた保管作業。②写真史料の保管作業の二つを主にやっている。

【近世学寮史研究】

過去の「三〇〇年史」の研究成果について改めて確認し、その観点から近世における宗学を中心であった「学寮」についてその重要性に着目する。慶長以降の大谷派における講義・典籍・関連事項の記録等について、年表形式でデータ化した「大谷派学寮年表」を作成することと、真宗教団における教学を歴史的な視点から把握することについては、大谷派だけではなく、本願寺派の宗学を中心であった「学林」の流れを把握する必要性が認められたことから、「大谷派学寮年表」と同様に、『龍谷大学三五〇年史』をもとに「本願寺派学林年表」の作成をも行ってきた。その結果として今年度に『真宗学事史年表』という形で一応の完成を見た。今後はこの年表を活用し、近世学寮研究を進めることが課題となる。

また、『真宗学事史年表』の作成と並行して、学寮第五代講師であり、諸国に多くの門弟を輩出した香月院深励にスポットを当て、近世学寮の研究を進めることにした。香月院深励研究を始めるに当たり、本年度は基礎作業として著作目録を作成することから着手した。本学図書館の協力を得て、図書

館所蔵の香月院深励関係の史料を調査し、その成果として「香月院深励関係資料目録台帳」を作成した。また、その成果を加藤基樹研究補助員が「大谷大学図書館蔵『香月院深励関係書籍目録』と香月院深励をめぐる歴史研究課題の覚書」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第二四号、二〇〇七年）として発表している。そして、香月院深励の自坊である福井金津永臨寺など関係寺院の調査も行った。今後の課題としては、加藤論文で挙げられた研究課題も含めつつ、時代背景や前後関係を考慮しながら香月院深励の学問の特質を明らかにすることである。

【他大学大学史編纂室との交流】

全国大学史資料協議会（西日本部会）に参加し、他大学の学史編纂の現状と課題について学び、他大学の大学資料館や博物館などを見学し、刺激を受けつつ、活発な意見交換により今後の大学史研究のあり方について学んでいる。

国際仏教研究

〈英語班〉

一、シンポジウム「南都仏教の中世的展開」の開催

一〇月六日（金）～七日（土）の二日間にあたり、豊流館メディアホールにおいてシンポジウム「南都仏教の中世的展開」を開催した。国内外から多数の研究者の参加があり、中世の南都仏教の展開について、最新の研究成果をもとに活発な議論が交わされた。また会期中には、プリンストン大学ジ

ヤクリン・ストーン教授による公開講演「死の克服―中世日本の臨終行儀をめぐる―」もまた、一般の聴衆を含め、氏の「臨終行儀」をめぐる興味深い発表に対して多数の質問が寄せられた。本学からは研究発表「凝然による華嚴教学の組織化」(織田顕祐助教)、「中世の聖徳太子像―親鸞の場合」(三木彰円講師)、「叡尊『勸善菩提心集流壅記』をめぐる」(藤谷昌紀非常勤講師(当時))がなされた。

ii' "An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings" の出版に向けて

ニューヨーク州立大学 (The State University of New York) から出版予定である清沢満之「曾我量深」金子大栄、安田理深の英訳論文集 (*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings*) に収める序文やビブリオグラフィの原稿を整理し、完成させた。マーク・ブラム嘱託研究員を招き、検討会を重ねた。

〈ドイツ・フランス班〉

一、十一月三〇日(木)―十二月一日(金)の二日間にわたり、響流館メディアホールにおいて「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院 (EPHE) 合同シンポジウム…宗教と近代合理的精神―日仏文化の比較をととして」を開催した。門脇健研究員による基調報告「世俗化とライシテ」をはじめ、マイケル・バイ嘱託研究員による「現代日本における市民宗教」、藤枝真研究員による「現代日本の終末期医療における仏教と医療の関係」、井上尚実研究員による「地獄の喪失

―宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化」、阿部利洋研究員による「お骨と死生観―現代日本における葬送の新たな取り組みから」の各発表が行われた。また、EPHEからは、研究発表「現代フランスにおける政教分離と宗教」(ジャン・ボペロ教授)、「医療と宗教における死の世俗化」(セヴリース・マテュウ教授)、「神道、仏教の近代化及び宗教観再考―明治宗教史の一ページ」(ハルトムート・ロータモンド教授)、「ウルトラモダンの文脈における宗教」(ジャン＝ポール・ヴィレーム教授)、そして総括(ボペロ教授)があった。

二、マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の著書『マルティン・ルター』の翻訳作業を進めている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

〈中国班〉

中国東北地域(いわゆる満洲)と東部モンゴル地域(内モンゴル自治区東部)における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにするために、今年度は以下の研究活動を実施した。

一、大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料(通称…田代文庫所蔵)の目録作成

二、二〇〇五年度に開始した中国東北・東部モンゴル地域関連資料の目録作成作業を今年度も継続し、旧満洲関連の綴資料(仮番号ハ―一二)の目録作成作業を完了した。また、これと関連して、二月二日(水)に「大谷大学所蔵東本願寺中国布教関係史料整理の課題―現況の報告および今後の活動に

ついて」と題して、木場明志教授より基調の報告がなされた。

二、中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

八月二四日(木)―二九日(火)、桂華、松川の研究員二名は、木場明志本学教授と共に中国東北師範大学(長春)を訪問し、中国側参加者とともに、吉林省の長春・松原、内蒙古自治区の烏蘭浩特、葛根廟にて共同現地調査を実施した。

一二月一日(金)―一〇日(日)、招聘研究員として曲曉範・劉景嵐両氏(東北師範大学)が本学にて研究活動を実施した。この間、一二月八日(金)に響流館マルチメディア演習室にて研究会を実施し、研究発表「偽滿洲国の「靖国神社」―「新京建国忠靈廟」の建築過程及び偽滿当局がそこで挙行した祭祀活動」(曲曉範・東北師範大学歴史文化学院教授)、「内モンゴル東部地区におけるラマ教の影響と改革」(劉景嵐・東北師範大学歴史文化学院副教授)がなされた。

二〇〇七年三月二七日(火)―三月三十一日(土)、桂華・松川の研究員二名は中国東北師範大学(長春)を訪問。双方の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。また、北京においては中国仏教協会を訪問し、中国社会科学院世界宗教研究所のジャミヤンカイチョー(嘉木揚凱朝)副教授、中央民族大学のウルジーパヤル(烏力吉巴雅爾)教授、中国仏教協会国際部日本科の李賀敏科長と、小栗栖香頂をはじめとする中国布教者関連史料として中国側に残され

ているものに関して意見を交換した。

西藏文献研究

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。

一、大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化
A 北京版チベット大藏経の研究

一九三〇―三二年に刊行された『甘殊爾勘同目錄』は、絶版となって久しいが、すぐれたレファランスとして、復刊を望む声が大い。そうした声に応えるべく、現在準備を進めており、その一環として補訂必要箇所抽出と確定作業をおこなった。この作業は、二〇〇五年度内に完了しており、その成果を本年度内に発表する予定にしていたが、公表に足る十分な整理ができていなかったため、これを見合わせた。また、北京版チベット大藏経所収のテキストに対する研究もおこなった。対象としたテキストは、世親造『縁起経釈』(『Tenzing 'brel par 'byung ba dang po dang nam par dbye ba, Pratyasamutpadayakha』(Pek. 5496)である。本テキストは、世親の縁起観を表明しているものであり、彼の思想的変遷を知る上で極めて重要なものである。本年度は、北京版にもつぎテキストを入力し、デルゲ版との校合をおこなった。

B 蔵外チベット語文献の研究

この研究には二つの柱がある。一つは、大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献のうち稀観書の公開であり、もう一つは公開を目的としたチベット語文献電子テキスト化である。前者の研究としては、稀観書の一つであるグイェ・ツルティムセンゲ (dGe ye Tshul khriims seng ge) 著『インド・チベット仏教史 (rGya bod kyi chos 'byung rin po che)』(チベット蔵外 No. 11847) の校訂テキストを、人名・地名索引および影印を付して出版し、関係研究機関や研究者に配布した。後者の研究としては、複数のテキストの電子化をおこなっている。第一にあげるのは、ブムタク・スムン (Bum phrag gsun pa Byams pa chos grub, 1433-1504) 『俱舍論語義解 明・善説の陽光 (Dam pa'i mngon pa mdzod kyi tsing gi don gsal bar byed pa'i bstan bcos legs par bshad pa nyi ma'i 'od zer)』(大谷チベット蔵外 No. 13972) である。本テキストは、すでに「大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書」として影印公開されているものの、内外の研究者に十分に活用されているとは言い難い。ウメー書体で縮略文字が多用されている写本であることがその理由の一つで、本研究では、本テキストを利用しやすい形で提供するため、縮略文字もすべて正規の綴りに直して入力作業を進めている。本年度は全章のうち、第一、二、六、七、八章の入力を終了した。また、『マルバニラレーバ小伝 (Mar pa dang ni la ras pa'i mnam thar)』(大谷チベット蔵外 No. 11814)、『当班所蔵のチベット語文献のうち、チベット歌舞劇の演目の一つ『ドワ・サンモ

(Gro ba bzang mo'i mnam thar)』の読本、ツァンニョン・グールカ (gTsang smyon he ru ka Rus pa'i rgyan can, 1452-1507) 『ツァン・伝 (sGra bgyur mar pa lo tsā'i mnam par thar pa mthong ba don yod)』の電子化をおこなった。『マルバニラレーバ小伝』ならびに『ドワ・サンモ』は電子化作業が終了し、ウェブ上にこれを公開した。『マルバ伝』は入力作業が終了、現在校正作業中である。さらに、研究補助員・目片祥子より『サキャ・ナンディタ伝スンドーム (Sa skya pandita'i mnam thar gsung sgras ma)』の電子化校訂テキストの提供を受け、これをウェブ上で公開した。

二、国際学会への参加

八月二七日から九月二日までボン大学中央アジア学講座 (Zentralasiatische Seminar, Universität Bonn) がホストとなつて、グイェ・ツルティムセンゲに開催された第一回国際チベット学会 (11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies) に白館戒雲研究員・三宅伸一郎研究員・井内真帆嘱託研究員三名が参加し、それぞれ「Bod kyi sgra snyan ngag 'phel rgyas dang bdag dang 'khrungs yul gcig pa'i dpaug lo (チベット声明学・詩学の発展と私と同郷の『ハ』翻訳師)」「O tha ni gtsug lag slob chen gyi bod yig dpe mying zhib 'jug skor (大谷大学のチベット古写本研究『ハ』)」「Bka' gdams pa Manuscripts Discovered at Khara-Khoto in the Stein Collection (スタイン収集カラホト出土のカダム派写本)」と題する研究発表をおこ

なうとともに、各国の研究者との交流を深めた。

三、公開研究会の開催

一〇月三〇日には、アメリカのチベット仏教研究の第一人者J・ホプキンス・ヴァージニア大学名誉教授とチベットに関する総合学術情報サイト THDL のS・ワインバーガー・マネージャを招聘し、アメリカにおけるチベット研究の動向についてお話いただいた。また、十一月二九日には、ジャルサン・内蒙古大学蒙古学学院教授を招聘し、「アルシャー南寺における化身ラマの系譜について」をテーマにお話をうかがい、チベット・モンゴル仏教に特徴的な「化身ラマ」制度についての理解を深めた。

四、TLK のバージョン・アップ

MacOSX 対応 Tibetan Language Kit (TLK) のバージョンアップのための作業をすすめた。この作業にはおもに、野村正次郎嘱託研究員ならびにステイプ・ハートウエル嘱託研究員があたった。一〇月に、Otani Unicode Tibetan Language Kit と名前を改め、そのインストーラーおよびコンバータをふくめたPublic Beta版を公開した。

五、パリー語文献研究

近年東南アジア独自の仏教受容のありかたを示すものとして「擬経ジャータカ」と呼ぶべきものが注目を集めている。本学図書館所蔵パリー語貝葉写本のうち『パンニャーサ・ジャータカ』も、そうしたものの一つである。『パンニャーサ・ジャータカ』関係資料の収集・調査と、現地研究者との意見

交換のため、清水洋平嘱託研究員が三月一四日から二四日までタイに出張した。

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌の記念事業として、二〇〇〇年以来、本山御遠忌本部が進めてきた「兩堂再建史料の研究・整理・保管」を、真宗大谷派と本学との間で業務委託契約を締結し、昨年度完了した研究プロジェクトである。東本願寺所蔵史料の調査は、一九九〇年以来続行されており、漸次その全容が明らかになりつつあるが、その六万点以上の古文書・古記録類の中に、兩堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する史料は六千点にもぼる。本研究は、それら本廟造営史料の調査・整理・研究をふまえ、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の編纂を進めることを目的とする。

今般の研究では、新たに発見された東本願寺所蔵の再建造営史料の利用を通して、江戸期における再建造営の諸相について、その全般的な把握が課題とされる。研究推進計画では、（一）造営史の全体像の把握、（二）史料調査、（三）史料翻刻、（四）国内史料調査、（五）『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次作成、（六）その他、の各項目を立て、それぞれが有機的に連関するように研究が進められている。

まず（一）全体像の把握では、本山機関紙によって明治度

造営進行過程史料を整理すると共に、その図表化から作事組織のあり方と変遷、担当部署における事業内容の把握が行われている。また江戸期造営に関しては、関係史料の抽出・写真撮影を行い、それぞれの再建ごとに分類・整理・分析を進めている。(二)史料調査については、東本願寺所蔵史料の内、財務部所管両堂再建史料に関しては、段ボール二三〇箱(約六千点)中、一箱〜二三箱、二〇〇箱〜二三〇箱の調査が終了し、残る二四箱〜一九九箱は、優先史料を選び出して精査を行っている。なお、上記史料群の中で『献木上申書』『献木適用簿』についてはデータベース化が図られ、明治度造営における献木状況や寄進の動向が把握されつつある。さらに諸国詰合、世話方、示談方の人名データベース化が進められており、在地から集まる材木の動きと共に、献木を仲介した人々やその組織の実態についても分析が行われている。また、真宗総合研究所に移管した本山史料に関しては、江戸期から明治度に至る焼失・再建関係史料の分類・整理・分析が順次に行われており、今までは明らかでなかった再建造営の諸相が次第に解明されつつある。(三)史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向を把握するため、東本願寺所蔵史料の中でも、それに直接関わる日記・記録類を選び出し、必要に応じて写真撮影を行い、全文翻刻または関連記事の抄出翻刻を順次に進めている。合わせて、(四)国内史料調査では、本学図書館・博物館をはじめ、他機関所蔵の関係史料や既刊の活字史料の調査・収集・翻刻を行い、また名古屋

工作支場跡地確認や尾神嶽殉難地における聞き取り調査など実地踏査を実施しており、造営史全般のさらなる理解に努めている。また、今回のプロジェクトには、学外から建築工学・建築史分野の第一線の研究者に加わって戴いてところに特色があり、東本願寺所蔵史料の中に多数伝来する諸図面類の調査・分析を通して、東本願寺の建築学的な特徴の解明や寺院建築史における位置付けなどが期待される。(五)『真宗本廟(東本願寺)造営史』(仮称)の目次作成については、本研究の成果を具体的に明示するものであり、上記にみえてきた研究推進計画の各項目が有機的に結合する中で見極められなければならない。これについては、今しばらく研究成果の集約を待つて、今年度中には原案を取りまとめていく予定である。そのためにも(六)その他として、定期的に実施される公開研究会と個別課題の報告会は重要であろう。昨年度は二回、今年度もすでに二回の公開研究会を開催し、多数の貴重など意見を頂戴することができた。

第一回…伊藤延男氏(講題「造営史への期待と課題」)

第二回…川上貢氏(講題「真宗本堂の規模と形式―他宗派

寺院本堂との比較―」)

第三回…永井規男氏(講題「本山建築の造営と意匠研究の方法論」)

第四回…木場明志氏(講題「仏教復興と明治度造営」)

また、個別課題の報告会では、各データベースの活用方や両堂再建史料の性格・その基礎的な考察が順次に行われてお

り、目次作成に向けての活発な意見交換がなされている。

四 『研究所報』の刊行

第四八号（五月一日発行）

研究所と教育改革 草野 顕之

二〇〇六年度「指定研究」研究組織一覧

二〇〇六年度「指定研究」研究目的紹介

二〇〇六年度「一般研究」選考結果発表

二〇〇六年度「一般研究」研究目的紹介

学会参加報告

特別研究員研究成果報告

彙報

第四九号（一〇月一日発行）

「衆縁の募、斧斤の力」を尋ねる 木場 明志

二〇〇五年度「指定研究」研究経過報告

二〇〇五年度「一般研究」研究結果概要

学会参加報告

研究調査出張報告

「蓮如・現代日本仏教のルーツ」出版について
彙報

執筆者紹介（二〇〇八年三月三十一日現在）

若槻 俊秀

元本学教授

長谷川 慎

本学非常勤講師

稲垣 淳央

本学任期制助教

廣瀬 幸市

元本学准教授

桂華 淳祥

本学教授

山本 琢

研究補助員

聖 凱

元特別研究員

山本 貴子

本学准教授

古川 哲史

本学専任講師